

特集 環境・農業生産・記録管理：文書史料に基づくエジプト環境史の構築

## 西暦7～13世紀ファイユーム研究のために — 文書と環境からのアプローチ

亀谷 学

弘前大学人文社会科学部講師

### I. はじめに

本プロジェクトにおいて筆者に課せられた課題は、西暦7～13世紀のエジプト、とりわけファイユーム地域について、文書史料を活用しながら、その環境の変化に焦点を当てつつ検討することである。対象とする時代はアラブ・ムスリム勢力がエジプトを征服してから、ファイユームについての詳細な調査報告が残され、また統治構造が大きく転換したアイユーブ朝期までの約600年間となる。当然ながら、この時代設定は極めて広いものであり、一人の研究者が詳細にカバーするにはあまりにも長い。しかしながら、ギリシャ・ローマ時代から近世に至るまでのエジプトの文書から、その環境変動との関わりの手がかりを探るという目標のもと、必ずしも狭義に自らが専門としない時代についても扱うことは避けられないため、敢えて覚書としてまとめたものであることを諒解されたい。

本稿ではまずアラブ・ムスリムの征服からアイユーブ朝期までのエジプトとファイユームの状況を概観し、その後、この時代に関わりのある文書史料についても、その研究状況について紹介する。後半ではまず10世紀以降のエジプトに大きな影響を与えた環境変動に関する近年の研究を踏まえた上で、文書史料と環境変動が社会に与えた影響を分析するための研究視角について農作物を軸に考察を行いたい。

### II. アラブ・ムスリムの征服からアイユーブ朝までのエジプトとファイユームの概観

本論に入る前に、まずはアラブ・ムスリムの征服からアイユーブ朝期に至るまでのエジプトとファイユームに関して、ごく簡単に概観しておこう。

西暦639年、既にシリアでの優位を確固たるものとしていたアラブ・ムスリム勢力は、アムル・ブン・アルアースに率いられてエジプトへの侵攻を開始した。640年にアイン・シャムスにおいて同地のビザンツ軍との戦いに勝利し、翌年、現在コプティック・カイロ（またはオールドカイロ）に位置する城塞バビロンを陥落させた。アムルはこの後転進し、ビザンツ帝国にとってのエジプトにおける首府であったアレクサンドリアに向かった。若干の混乱した伝承によると、アムルはアレクサンドリアを包囲して平和的にその都市に入ることを許されたが、ビザンツ帝国は海軍を送り、その地域の人々の力を借りて、645-646年に東の間アレクサンドリアを再占領したものの、彼らのアレクサンドリア回復はすぐに覆されたという。アムルは中心となる軍営都市を、ナイル川沿いにあるバビロン城の近く、現代のカイロの南部に位置するフスタートに建設し、フスタートはエジプトにおける統治の中心地、総督府となった。本稿で主に取りあげるファイユームの征服については確たる記述はないものの、バビロン入城の前後に征服がなされたと考えられる。コンスタンティノーブルに居を置いたビザンツ帝国にとってそうだったように、その後のカリフ政権にとっても、エジプトは征服当初から重要な穀物供給源となった。

その後エジプトは正統カリフ期、ウマイヤ朝期、アッバース朝期と中央のカリフ政権から派遣された総督によって統治される状況が続いたが、西暦9世紀の半ばにアフマド・イブン・トゥールーンが同地に赴任すると、彼はその軍事力を背景としてアッバース朝カリフに総督位の継続と世襲を承認させ、トゥールーン朝と呼ばれる政権が成立した。トゥールーン朝の支配は40年ほどで終わり、バグダードから派遣された総督が再び派遣されるようになったものの、ほどなくトゥールーン朝と同様に総督職を世襲するイフシード朝が成立した。

エジプトの政治的状況が大きく変わったのは10世紀半ばである。チュニジアに興ったシア派王朝であるファーティマ朝は、969年にイフシード朝を破ってエジプトを征服すると、フスタートの北に新しくカーヒラ(カイロ)を建設して拠点とし、アッバース朝の権威を認めずそれに対抗する一大勢力となったのである。これにより、アッバース朝の政治的影響を脱し、シリア地域などにも影響を及ぼすようになったエジプトは、この後数百年間にわたって東地中海世界の中心的プレイヤーとなったのである。

エジプトに拠点を移してからのファーティマ朝カリフ政権は、200年ほどの間続いたが、11世紀半ばからは後に述べる早魃などの影響もあって弱体化し、十字軍の侵攻にも苦しめられ、12世紀までにはほぼエジプトのみを支配する状況であった。12世紀後半に入ると、ザンギー朝のヌール・アッディーンが派遣したシールクーフを受け入れて宰相とし、彼の急死後にその勢力を継いだ彼の甥ユースフ(サラーフ・アッディーン)が実権を掌握し、彼が仕えていたファーティマ朝の第14代カリフの死亡とあわせてアッバース朝カリフの権威を承認した。このことによって、ファーティマ朝は滅亡し、エジプトはアッバース朝の権威に復すことになったのだが、実際の状況としては、サラーフ・アッディーンとその後継者たちをスルターンとするアイユーブ朝がエジプトをその本拠として成立したということになる。

さて、ファイユームはそれ以前の時代において、年代記や地理書の中でエジプトの一地方とし

て記述される他には、ほとんどまとまった記述がなされていなかった。しかし、アイユーブ朝のスルターン・サーリフの命により各地を調査したナーブルスィーの手によって、『ファイユームの歴史』が著されたことで、ファイユームについての情報はエジプトの他のどの地域よりも豊富なものとなったのである<sup>2</sup>。

本稿では、この『ファイユームの歴史』にナーブルスィーが書き残した情報までをそのスコープとすることとなる。

さて、初期イスラーム時代からアイユーブ朝期までのファイユームがどのような変化を経験したのか、という点について、一つの視点が存在する。それは、ファイユームは徐々に衰退していった、というものである。このファイユームの「下降史観」は、征服以前の時代まで含みつつ、形成されてきたものである。例えば、2013年に8世紀のファイユームに関する文書群の研究を出版したサイベスタインは、以下のように述べている<sup>3</sup>。

ファイユームの、耕作され人が住んでいる地域は、オアシスの境域地帯における灌漑システムの無視と村落の放棄とともに、3世紀に急速に減少した。これは、4世紀には留保され、7世紀までの間に、いくつかの村落では、若干の復興や、地方の拡大も見られた。しかし、10世紀には、地方への大きなダメージを引き起こしたファーティマ朝の征服によって更なる衰退が証言されている。ガラク・ベイスンを走る運河は、もはや機能しておらず、イブン・ハウカルが10世紀にそれを記述した時までには、それらに連なる町も放棄されていたという。トゥトゥーン/テブテュニス(Tutun/Tebytnis)のようないくつかの町は、オアシスのより内側へと移動することで一時的に生き残っていたし、ガラク・ベイスンのそばの他の町は11世紀まで栄えていたが、それらの町も、中世後期まで生き残ることはできなかったようだ。13世紀のアイユーブ朝の役人、ナーブルスィーは、彼の調査記録の中で、運河沿いの村々のいくつかにしか言及しておらず、また、それらが彼の

時代までに放棄されたと付け加えている。同じく13世紀には、ハラウィーが、「旧約の預言者ヨセフがファイユームを『建設』した際には360あった村が、彼の時代までには36しか残っていない」と、オアシス領域の減少に言及している。マムルーク朝期のマクリーズィーは、劇的ではないが、より实际的な減少として、360から156というファイユームの村の減少を述べている<sup>4</sup>。

彼女はこれまでの研究を参照しながら、3世紀以降のファイユームが、中間期を挟みながら漸次の衰退を経験してきたという形でまとめている。

このような下降史観に一定の説得力を与えているのは『ファイユームの歴史』の中の記述であろう。佐藤次高のまとめたところによると、「用水不足からファイユームの南部だけでも22のむらが荒廃に帰し、その後復興されたむらはわずか五箇村に過ぎ」ず、また「ここ100年以上にわたって運河やダムの管理がおろそかにされてきた結果、泥土が堆積し、灌漑水は減少して62台の揚水車と2台の石臼が使用されていない状態であつて、「スルターン・サーリフがナーブスィーに調査を命じたのも、この地方の改善・復興策 (iṣlāḥ al-Fayyūm wa 'imārat-hu) を実施するための予備知識を得ることが目的であった」という<sup>5</sup>。『ファイユームの歴史』にあるこのような記述は、ギリシャ・ローマ期のファイユームを豊かな土地であると考えた言説と相俟って、「ファイユームの衰退」を印象づけるものとなっていると考えられるのである。

### Ⅲ. アラビア語文書史料の状況

初期イスラーム時代のエジプトの具体的諸相を知るための最も重要な史料はパピルス文書史料である。周知の通り、パピルス紙を用いて文書を作成するという伝統は、古代エジプトの時代より連続と続けられてきたものである。ここではイスラーム征服以降にアラビア語で書かれたパピルス文書、そしてその後使用されるようになった紙

のアラビア語文書を対象を絞って、その歴史研究における利用について、その端緒から近年の動向までを紹介したい<sup>6</sup>。

初めてアラビア語パピルス文書が校訂出版されたのは、1825年にフランスの東洋学者ド・サシー De Sacyによってであった。それ以降19世紀後半に至るまでほとんど新たなアラビア語パピルス文書研究は行われなかったが、1877年にファイユーム近郊において、ギリシャ語、アラビア語、コプト語のテキストが書かれた数千のパピルス文書が発見されたことによって、この時代のパピルス文書研究が本格的に始められることになった。

20世紀半ばにはグロウマン A. Grohmann の諸業績を初めとして、様々な図書館・博物館に収蔵されたパピルス文書の読解・校訂に基づくアラビア語パピルス文書カタログの作成が行われた<sup>7</sup>。その後20世紀を通じて各地の図書館・博物館のコレクションをカタログとして校訂出版するものが徐々に現れてくるが、それはあくまでパピルス文書学者としての文献学的な関心に基づくものがほとんどであって、それを直接歴史的研究へと広げてゆく研究視角はそれほど見られなかった。その中でも森本公誠氏による『初期イスラーム時代エジプト税制史の研究』は当時においてパピルス文書研究と歴史研究を高いレベルで結びつけて、初期イスラーム時代の行政制度について明らかにした極めて先駆的な業績であった<sup>8</sup>。20世紀末になると、欧米においても研究者個人が多くの図書館・博物館のコレクションを巡って、自らの研究する分野の文書をカタログとして校訂出版する流れも生まれ、その中で一つのテーマを歴史的研究としてまとめあげるものが生まれてきた<sup>9</sup>。

一方で、ピーター・ブラウンに端を発する古代末期研究の流れが、初期イスラーム時代史に影響を与え、古代末期から初期イスラーム時代を一つのまとまりとして捉えて研究しようとする動きが現れはじめた<sup>10</sup>。この流れは1970年代後半にクローンとクックによって発表された『ハガリズム』によって初期イスラーム時代史研究に持ち込まれ、史料論的な議論と連動しつつ、多くの人に関心を持つ分野として成長を遂げた<sup>11</sup>。そこでは、言語は違えどパピルス文書の伝統によって移

行を比較的観測しやすいエジプトが対象とされることも多かった<sup>12</sup>。

そのような状況の中で、2002年にInternational Society for Arabic Papyrology、通称ISAPが設立された。これは「アラビア語パピルス学のための」国際学会であり、必ずしもパピルス文書だけを対象に限ることなく、その周辺分野を巻き込みながら、アラビア語パピルス文書の校訂や紹介、それを用いた様々な分野の研究が報告される会とされた<sup>13</sup>。同学会は2002年のカイロにおける第一回大会をもって正式に発足し、その後、2004年スペイン、2006年アレクサンドリア、2008年ウィーン、2011年チュニジア、2014年ミュンヘンにおいて開催され、そこでの報告はE.J.Brill社から論文集の形で刊行されている<sup>14</sup>。

ISAP設立後には、インターネット利用の簡易化の影響もあり、アラビア語パピルス文書研究の状況を改善する様々な進展が見られた。第一にISAPのウェブサイトのアラビア語パピルス文書に関する情報が集約されたことである<sup>15</sup>。そこには既に校訂済みのアラビア語パピルス文書の網羅的な文献目録や、各地のコレクションに関する情報が掲載されており、アラビア語パピルス文書について調査を行う際には、最初に参照すべきものとなっている。

さらに校訂出版されたアラビア語パピルス文書のテキストをデータベース化したArabic Papyrus Database (APD) が公開されている<sup>16</sup>。アラビア語パピルス文書の横断検索を実現しており、現時点ですべての校訂されたテキストが入力されているわけではないとはいえ、ある語についてそれがアラビア語パピルス文書の中でどのように用いられているかを知りたい時には極めて有用である。また、文書においては特に脈絡もなく発信者と受信者に了解されている固有名詞が登場することが少なくないが、そうしたものについても、このAPDを利用することで解決する場合もある。

未校訂のアラビア語パピルス文書についても、近年各図書館においてデジタル画像として公開されているものが少なくない。それらの情報もまた、ISAPのウェブサイトの中に集約されている<sup>17</sup>。また、もともとアラビア語パピルス文書の

ために作られたシステムではないものの、いくつかのデータベースのポータルとして、papyri.infoなども利用可能となっている<sup>18</sup>。

このように様々な進展の見られるアラビア語パピルス文書研究ではあるが、それでもなお、その速度は十分とは言いがたい。上記のデータベースのような支援を受けてさえ、未校訂のアラビア語文書の一つ校訂するためには相当の時間がかかることになる。アラビア語パピルス文書の校訂を実際に行うに足る能力のある者もそう多いわけではなく、一方で、より読みやすい文書から校訂が行われてゆくという点を考え合わせると、今後アラビア語パピルス文書校訂のスピードが上がってゆくかについては必ずしも楽観的とはなりきれない部分がある。

現在ではアラビア語パピルス文書の総点数として150,000点という数字が挙げられている。これらは、世界各地の図書館・博物館に所蔵されていると言われるが、その大半は断片と推定され、そのうちのどの程度が校訂可能であり、歴史研究に役立つような内容を備えているかについては、はっきりとはわからない。また、同じコレクションの中に紙や羊皮紙の文書も含まれている場合、その数も含めて計算されている点にも留意が必要である。

さて、これまで校訂・研究されてきたアラビア語パピルス文書から、その内容を分類すると以下のようにものになる。

#### (1) 個人的な文書

私的な手紙、遺産分配書、結婚契約書、離婚確認書、帳簿、売買契約書、賃貸契約書、領収書、商品目録、業務に関する連絡、商品の注文書など

#### (2) 公的文書

税支払い要求、税領収書、税に関する調査、布告、行政に関する連絡、裁判官のもとへの出頭命令、法的手続きに関する記録、請願、外交文書など

なお、書体や筆致に関してはグロブによる包括的な研究があり、必ず参照すべき文献となってい

る<sup>19</sup>。またやや古くなりつつあるものの、アラビア語パピルス文書に基づいて初期のアラビア語文法について分析したホプキンスの研究も、やはり必携の工具書となっている<sup>20</sup>。

パピルス紙を用いた文書作成は、イスラーム世界に製紙法が伝わった後、紙の優位のもとに、徐々に公的文書から置き換えられていったようだ<sup>21</sup>。とはいえ、西暦11世紀まではアラビア語パピルス文書がそれなりに利用されていたようであり、それ以降はパピルス紙の利用は少なくなる。

その後、紙が文書の主要なメディアとなったわけだが、ファーティマ朝期以降の紙の文書もまた伝存し、パピルス文書と同様に、世界各地の図書館に収蔵されている。これについて、すべての時代を網羅した情報はないものの、ISAPのウェブサイトには、紙や羊皮紙の文書についての校訂・出版の情報もあわせて掲載されている<sup>22</sup>。また考古学調査において文書が発見されることもまだまだ見られる<sup>23</sup>。

なお最初の200年間のアラビア語文書に関しては、ライデン大学で行われたプロジェクト「イスラームの形成：下からの視点 (The Formation of Islam: The Views from Below)」<sup>24</sup>において既に調査されている文書のリストが作成されており、現時点で696点の文書についてのデータが整理されている<sup>25</sup>。それによると年代記載のあるものについては199点のうち22点、年代記載のないものも含めると696点のうち101点がファイユームのものとなっている。

同プロジェクトにおいてはファーティマ朝期の文書についても、同様のリストが作成されており、666点の文書が挙げられている<sup>26</sup>。そのうち年代記載があるものに関しては272点のうち50点の文書がファイユームに関するものである。さらに年代記載のないものも含めると、666点のうち53点がファイユームに関するものである。

以上、当該時代に関するアラビア語文書の状況について整理したが、11世紀以降については、ゲニザ文書を利用することが不可欠である。とはいえ、現在のところ、2000年代以降のものまで含めたゲニザ文書に関する研究を網羅するような文献やウェブサイトは見あたらない<sup>27</sup>。ゲニ

ザ文書自体に関しては、いくつかのウェブサイトでもデジタル画像での公開も始まっている<sup>28</sup>。また、ユーザー登録が必要となるが、ゲニザ文書について検索し、データが存在するものについては文書画像や翻刻されたテキスト、当該文書を用いた研究についての情報などを見ることができるフリードベルグ・ゲニザ・プロジェクト (Friedberg Genizah Project) は、本格的にゲニザ文書を研究するには非常に有用なサイトである<sup>29</sup>。

#### IV. 中東における気候変動とエジプト・ファイユーム社会の農業

初期イスラーム時代からアイユーブ朝期までのエジプトの環境について扱った専論は筆者の知るかぎり見あたらない。そこで本節では、10世紀から11世紀にかけての東地中海世界の環境変化について論じている近著を簡単に紹介し、それをもとにエジプト、ファイユームの環境や社会とどのように関連づけることが可能か、について検討することとしたい。

エレンブルム『東地中海の崩壊：環境変動と東方の衰退950-1072』は、表題に示された10世紀半ばから11世紀後半にかけて、それまで隆盛を誇っていた東地中海の各地域の中心的政権が相次いでその威勢を失っていったことの原因を、環境変動に求めたものである<sup>30</sup>。

エレンブルムは、通常この時代が温暖な時代であったとされる西欧の環境変動に関する通説に対して、東地中海世界の記録からは、チュニジアのカイラワーン、イタリアのローマ、バルカン半島を繋ぐ想像上のラインを境に、状況は異なっていたと述べる。この線の東側では、気候変動による災厄の影響を大きく受けており、①遊牧化と移動の波、②官僚機構の崩壊、③遊牧国家の成立、④都市文化の衰退、⑤周縁農業地域の放棄、⑥文化全般の衰退、⑦非ムスリムへの攻撃とレヴァント地域のイスラーム化といった様々な社会変動を引き起こしたという。中でも、著者はエジプトの穀物供給地としての重要性を強調し、エジプトにおいて当該期間に天候不順等を理由とする不作・飢

饑饉が継続的に起こったことをこの変化の主要な原因のひとつと位置付けている。

そのエジプトにおける環境変動について、エレンプルムは9世紀以前の状況と10-11世紀の状況が明らかに異なるという点から議論を組み立ててゆく。それによると、西暦283年から850年までの間に、9回の早魃が記録されていることと比べて、10世紀から11世紀までに9度の早魃が生じ、さらにそれが複数年続いたという。例えば、1065年から1072年まで続いたと言われる早魃は、「大災害(al-shidda al-'uzamā')と称され、フスタートを破滅に至らせた出来事として記憶されており、またこれに先立つ1052年から1056年までの飢饉の際には、1055-6年の記録として、エジプトでは400,000イルダップ(およそ32,000トン相当)の小麦を輸入する必要があったという<sup>31</sup>。このような災害がエジプトの社会に大きな打撃を与え、東地中海世界全体に影響を与えたのだとされる。もちろんエジプトだけではなく、様々な地域で気候不順や早魃が生じ、それが全体として東地中海世界に大きな社会変動をもたらしたという、その諸相の分析がエレンプルムの本論となるわけであるが、当該地域における「穀物庫」としてのエジプトの役割が十分に機能しなくなったことで、様々な危機を押しとどめることができずに、地域全体が変動に巻き込まれてゆくことになったと論じているのである<sup>32</sup>。

エレンプルムの議論では、その前提となる事例に関して、ローマ・ビザンツ期や初期イスラーム時代といった異なる時代の史料の相違をどう評価するかという点について十分な議論は行われておらず、その点に留保は必要であるが、しかし10-11世紀の東地中海世界に起った社会変動を環境の変化を起点に分析するという切り口を提示し、一つのモデルを示したことには大きな意義があると考えられる<sup>33</sup>。一方で、エレンプルムの議論から抜け落ちていることは、当時のエジプトにおいてどのように農業が展開され、どのような作物が生産されるようになっていたのか、という点である。以下、ファイユームを例にとりて、検討してゆこう。

初期イスラーム時代におけるファイユームの主

要農作物は小麦、そして亜麻であった。ウマイヤ朝期のパピルス文書に言及がある作物の多くは小麦であるし、9世紀の後半に地理学・歴史学の著作を著したヤアクービーは、ファイユームについて「特筆すべき小麦」を産するとも述べている<sup>34</sup>。またヤアクービーは同じ箇所では粗布(khaysh)を産することにも言及しているが、この粗布については、9世紀に由来するアラビア語パピルス文書にも多くの用例が見られ、主に亜麻で作られたものを指していたと考えられる<sup>35</sup>。ローマ期には、亜麻は主にナイル・デルタ地域で栽培されていたが、アラブ・ムスリムの征服前後のいずれかの時点でファイユームにおいても盛んに栽培されるようになった<sup>36</sup>。既に8世紀半ばの時点では、ファイユームにおいて亜麻に対する税や、亜麻の取引に関する文書が存在している<sup>37</sup>。

10世紀に自ら同地を訪れたイブン・ハウカルの記述では、その地の織物産業の隆盛が語られている一方、マディーナト・ファイユームの主要作物は米であるとも記されている<sup>38</sup>。米の栽培はアッバース朝初期にはバグダードからエジプトまでの地域に広がっていたとされる。ファイユームにそれがもたらされたのがいつかは判然としないが、8世紀ファイユームの文書群の中には見あたらない。

その後ファーティマ朝後半からアイユブ朝期にかけて、サトウキビの生産も行われるようになったと考えられ、『ファイユームの歴史』の時代までには急成長を遂げていたようである<sup>39</sup>。

さて、コルテセの研究によると、特にファーティマ朝期に入って、織物産業で財産を築こうとする政権に近い貴顕の人々の主導のもとに、小麦から亜麻(やサトウキビ)への作物転換が行われていたという<sup>40</sup>。これと地中海・インド洋交易の隆盛に伴う亜麻布輸出の増加とが相俟って、特にカイロ以南の上エジプトでの亜麻栽培が盛んになった。そこに起きたのが11世紀半ばの「大災害」であり、商品作物である亜麻のために小麦などの穀物の供給が疎かにされていたために、その早魃の被害が拡大したのだという<sup>41</sup>。これをファイユームにおける作物の消長とあわせてみたとき、どのような構図を描くことができるであろうか。

ファイユームはまさに、当時亜麻栽培と織物産業で栄えた地域であった。コルテセの仮説を妥当なものであるとするならば、ファイユームの「衰退」の原因は亜麻栽培を拡大しすぎたことに帰せられるであろう。しかし10世紀後半の状況を見るかぎり、亜麻とともに米も盛んに作られていたはずである。コルテセはその議論の中で小麦と亜麻の二つの農作物の対立軸で論を展開しているため、他の作物にはほとんど言及していない。

13世紀の状況を反映する『ファイユームの歴史』によると、亜麻について税を課されている場所は、ファイユーム全体に広がっているわけではなく、ラーフーン、その付村ハイシャ、ナムーサタイン、ディマシュキーン・バサル、バビージュ・ガイラーン、そしてドゥムーシヤであり、これらはファイユーム盆地の主要部分というよりは、その運河の入り口に当たる、ナイル本流に近い場所となっている<sup>42</sup>。『ファイユームの歴史』に見られるアイユーブ朝期の状況が、どの程度以前からの状況との継続性を有しているかは明らかではないが、ドゥムーシヤを除いて、これらの地域でほとんど小麦が生産されていないようであることは、過去の大災害の結果として、亜麻栽培が放棄され、小麦が植えられるようになったわけではないことを示唆しているように思われる。

むしろ、『ファイユームの歴史』に見られる米作付け面積の減少が、ファイユーム盆地本体での「衰退」の一側面として捉えられるのではなかろうか<sup>43</sup>。米は夏作物であり、かつ、より多くの水を必要とする。早魃の際には、他の作物に増して、被害を被ったであろう。それはイブン・ハウカルが述べているように、地域全体としてではなく、マディーナト・ファイユームのこととしてなされていることと呼応すると思われる。ファイユーム盆地の中ではナイルの通常の灌漑ではなく通年の水利用が可能であり、夏作物の栽培に適していたと考えられるからである。あるいは、アイユーブ朝によるファイユームの「復興策」には、米が栽培されていた地域で新たな商品作物としてのサトウキビを生産するという意図があったのかもしれない<sup>44</sup>。

『ファイユームの歴史』以前の時代について、量

的な分析を行うことは、現時点では困難である。とはいえ、以下のようなことは指摘できるだろう。ファイユームが、「衰退」のイメージで語られる背景としては、上述のサイペスタインの概観にあるような、アイユーブ朝期からマムルーク朝期にかけてのファイユームについての記述が、大きな証拠となっていると考えられる。そこでは、それに先行する時代の環境変動に基づく社会変動については記述が見られず、単に灌漑施設の不整備が語られるのみであった。これは、そのような社会変動によって、人口減が生じたために起こったことであるとともに、耕作可能地の移動によって廃村となる場所が変動したとも考えられる。それは確かに一つの衰退ではあるだろうが、おそらくはエジプト、さらには東地中海の多くの地域で経験されたことではなかったろうか<sup>45</sup>。また、ファイユームにおいて亜麻が占めていた位置は、アイユーブ朝期までには失われていたようであるが、これはむしろ、社会変動の影響において国際的な貿易網がほころんだことを反映したものではないだろうか。ユドビッチが指摘するように、ゲニザ文書からは亜麻が11世紀半ばまで地中海やインド洋での国際貿易の商品として取り扱われていたことがわかる<sup>46</sup>。一方で、『ファイユームの歴史』には見るべき手工業はないと記されており、これに対して佐藤次高は、イブン・ハウカルが述べるような亜麻織物や毛織物業がまったく廃れてしまったとは考えられず、他の地方のイスラム都市と同様に、ファイユームの町にもかなりの量の織物製品が集積されていたと見るのが自然だと述べている<sup>47</sup>。確かに、ファイユームにおいては依然として、亜麻が生産されていたわけであり、産業自体がなくなったとは考えられないが、国際的な貿易網に乗った亜麻産業全体が11世紀後半を境に下降したことを示すものではなかろうか。

## V. むすびにかえて

本稿では、7～13世紀のエジプト、特にファイユーム地域について、その環境の変化と文書史料との接点を求めて、当該時代のエジプトとファイ

ユームの概観から始め、アラビア語文書史料についての研究状況を紹介したのち、この時期のエジプトの環境変動とファイユームにおける農作物の変化について検討を行った。本稿での議論は未だ初歩的な段階に留まっており、なにかの結論を提示するには至っていない。とはいえ、特に10世紀から12世紀までの時期において、環境変化がもたらした社会変動が様々な史料の中に現れており、ファイユームにおける衰退と考えられていた事象は、ファイユームだけの状況を反映したものではなく、エジプト社会全体が被った変化の

一端であったことについては、ひとつのモデルを示すことができたかもしれない。

史料に見られる社会的な変動は、多くの場合複合的な要因に基づくものではあるが、環境はその中でも大きな社会変動を起こしうる重要なファクターとなっている。エジプト社会における環境、そして環境の及ぼす社会変動のメカニズムについて、最も重要な史料となる文書を中心としながらも、様々な史料を組み合わせながら考えてゆくことが必要となろう。

## 註

- 1 以下の歴史的概観についてのより詳細な情報については、[Petry 1998]を参照されたい。また、ファイユームについては近刊の[Rapoport forthcoming]に詳細に解説されるが、本稿でもその草稿を参照し、以下の記述に適宜引用した。ここに感謝したい。
- 2 Abū 'Uthmān al-Nābulṣī al-Ṣafadī, *Ta'rīkh al-Fayyūm wa Bilād-hu*, al-Matba'at al-Ahliya: al-Qāhira, 1898.『ファイユームの歴史』についての具体的な情報は、[佐藤 1988, 265-270]に詳しく解説されている。
- 3 Sijpesteijn 2013, 29-30.
- 4 マクリーズイーの挙げる156という数字は、ファーティマ朝期に記されたムサッビヒーの年代記からの引用であり、11世紀初頭の状況を反映していると考えられる。Rapoport, forthcoming, p.14; Gaubert and Mouton 2014, 171.
- 5 佐藤 1986, 265-266.
- 6 以下の概観は主に[Sundelin 2004]を参照した。なおアラブ・ムスリムのエジプト征服以後も、ギリシャ語パピルス文書は行政の様々な場面で用いられ続けた。残念ながら本稿ではイスラーム期のギリシャ語パピルスについて紹介する余力はないが、征服以降のギリシャ語パピルス文書のリストが[Butler 1978, lxxvi-lxxxiii]にまとめられているのでそれを参照されたい。同時に本稿ではコプト語文書を扱うこともできなかった。稿を改めて検討したい。
- 7 なかでも代表的なものはエジプト国立博物館に収蔵されていた文書を読解・校訂した[Grohmann 1934-62]であるが、これは未完のままとなっており、現在でも続刊の噂を聞くことはあるが、未だ刊行されてはいない。
- 8 森本 1975; Morimoto, 1981.
- 9 例えば、土地賃貸契約文書と税金支払い証書を集中的に分析し、それらの校訂テキストとともに、農業と土地利用についての研究をまとめた[Frantz-Murphy 2001]などがある。
- 10 Brown, 1971.
- 11 Crone and Cook, 1977.
- 12 例えば、上エジプトの町ジェーム(Jeme)の女性の活動について600年から800年を範囲として研究した[Wilfong 2002]がある。
- 13 Arabic Papyrologyの前の前置詞がofではなく、forであることにはそのような意味が込められている、と筆者も参加した2011年第5回大会において語られていた。
- 14 現時点で第4回大会までのものが出版されている。筆者は第5回大会報告をまとめた論集に寄稿(“From Quṣṭāl to Jahbadh: An Aspect of Transition in the Egyptian Tax-Collecting System”)しており、遠くないうちに刊行される予定である。
- 15 <http://www.naher-osten.uni-muenchen.de/isap/index.html> (2017年1月31日確認。以下のURLについてはすべて同日に確認している)
- 16 <http://orientw.uzh.ch:8080/apd/project.jsp>
- 17 [http://www.naher-osten.uni-muenchen.de/isap/isap\\_collections/index.html](http://www.naher-osten.uni-muenchen.de/isap/isap_collections/index.html)
- 18 <http://papyri.info/>
- 19 Grob, 2010.

- 20 Hopkins, 1984.
- 21 製紙法のイスラーム世界への伝播については近年の清水和裕の研究を参照。清水, 2012; 清水, 2014.
- 22 [http://www.naher-osten.uni-muenchen.de/isap/isap\\_checklist/index.html](http://www.naher-osten.uni-muenchen.de/isap/isap_checklist/index.html)
- 23 例えばファイユーム地域のラーフーンにおいて発見された文書群が [Gaubert & Mouton 2014] として刊行されている。
- 24 <http://hum.leiden.edu/lias/formation-of-islam/>
- 25 K.M. Younes & J. Bruning, “Arabic documents from the first two Islamic centuries” (<http://media.leidenuniv.nl/legacy/younes-%26-bruning---arabic-documents-from-the-first-two-islamic-centuries.pdf>) これは2015年4月13日にアップデートされたバージョンである。
- 26 D. Livingston, “A list of Arabic documents from the Fatimid period” (version March 2015) <http://media.leidenuniv.nl/legacy/livingston---a-list-of-arabic-documents-from-the-fatimid-period-20150301.pdf>  
 なお、このリストにはゲニザ文書コレクションに含まれるアラビア文字アラビア語文書は含まれているが、ヘブライ文字アラビア語 (judeo-Arabic) 文書についてはその対象からはずされている。
- 27 これまでに刊行された目録としては以下のようなものがある。Reif, 1988; Hunter & Jefferson, 2004; Shaked, 1964. また、[Goitein 1967-1988] は、ゲニザ文書をテーマ別に探す際にも有用である。
- 28 例えばCambridge Digital Library (<http://cudl.lib.cam.ac.uk/collections/genizah>)、The Cairo Genizah Collection of the Bodleian libraries (<http://genizah.bodleian.ox.ac.uk/home>) など。
- 29 <http://www.jewishmanuscripts.org/>
- 30 Ellenblum, 2012.
- 31 Ellenblum 2012, 22.
- 32 エジプトからの穀物供給については、例えばアッバース朝初期の事例として、ヒジャーズでの旱魃の際に、エジプトから穀物を移送するようにアッバース朝のカリフへと嘆願する書簡の例などにも見られる。Ibn Abī Ḥātim, 191-193.
- 33 中世イスラーム世界について、このような環境の変化が社会に影響を与えたことを論ずるものとして、イラン地域を主に扱った [Bulliet 2009] があり、エレンブルムもこのプレットの議論を大いに参照している。
- 34 al-Ya'qūbī, 331. cf. Rapoport, forthcoming.
- 35 Rāgīb 1982-1992.
- 36 亜麻産業の隆盛に関しては [Franz-Murphy, 1988] に詳しい。
- 37 Sijpesteijn, 2013, 379-387, 398-403.
- 38 Ibn Ḥawqal, 160. なお、一般にエジプトにおける亜麻産業は、西暦13世紀を境に衰退し始めたと言われる。この時期にそれまで織物工房があったティンニス、ダミエッタ、ダービクなどで工房が閉鎖されたと言われ、それはヨーロッパからの織物輸入が増大していったからであるとされる。EI2, s.v. “KATTĀN”. ただし、亜麻産業がなくなったわけではないということは、オスマン朝期において亜麻運搬船襲撃事件が生じたことから窺える。cf. 長谷部, 2012.
- 39 佐藤 1986, 326-341.
- 40 Cortese 2015. 大災害と亜麻栽培の過剰増加の関連は、既に [Mayerson, 1997] において指摘されている。ただし政権関係者の介入については言及されていない。
- 41 Cortese 2015, 24-26.
- 42 ロンドン大学クイーンメアリー校のプロジェクト、「中世イスラームの村落社会 (Rūral Society of Medieval Islam)」 (<http://www.history.qmul.ac.uk/ruralsocietyislam/>) のサイトに公開されている『ファイユームの歴史』に基づく各種データのうち、「商品作物に対する税」に関するデータファイル (<http://www.history.qmul.ac.uk/ruralsocietyislam/Docs/47944.xls>) も参照した。
- 43 佐藤 1986, 327-328.
- 44 亜麻栽培が『ファイユームの歴史』の中で主要なものとして扱われていないことについて、ユドヴィッチは、中世の村落社会における農業生産物の変化は一般に想定されているよりも速い速度で進むという指摘をしている。Udovitch 1999, 283-284.
- 45 エレンブルムは周縁の農業地域が放棄されたことをエルサレムなどの事例によって指摘している。Ellenblum 2012, 196-227.

46 Udovitch 1999.

47 佐藤 1986, 276.

### 参考文献

- Ibn Abī Ḥātim: Ibn Abī Ḥātim, ‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad, *Taqdimat al-Ma’rifah li-Kitāb al-Jarḥ wa al-Ta’dīl*, Haydar ābād, 1952.
- Ibn Hawkal: Abū al-Qāsim b. Ḥawqal al-Naṣībī, *Kitāb Ṣūrat al-Arḍ*, Bayrūt, n.d.
- al-Maqrīzī: Taqī al-Dīn Aḥmad al-Maqrīzī, *al-Mawā’iz wa al-I’tibār fī Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthār*, ed. Ayman Fu’ād Sayyid, 4 vols. London, 2002–2004.
- al-Nābulī: Abū ‘Uthmān al-Nābulī al-Ṣafadī, *Ta’rīkh al-Fayyūm wa Bilād-hu*, al-Qāhira, 1898.
- al-Ya’qūbī: Abū al-‘Abbās Aḥmad b. Ishāq Ibn Wāḍih al-Ya’qūbī, “Kitāb al-Buldān”, in *Bibliotheca Geographorum Arabicorum*, vol. 7, ed. M. J. De Goeje, Leiden, 1892.
- Berkes & Haug 2016: L. Berkes & B. Haug, “Villages, Requisitions, and Tax Districts: Two Greek Lists from the Eighth-Century Fayyūm”, *Bulletin of the American Society of Papyrologists*, 53(2016), 189-222.
- Brown 1971: P. Brown, *The World of Late Antiquity: From Marcus Aurelius to Muhammad*, London.
- Bulliet 2009: R.W. Bulliet, *Cotton, Climate, and Camels in Early Islamic Iran: A Moment in World History*, New York.
- Butler 1978: A. J. Butler, *The Arab Conquest of Egypt*, ed. Peter Fraser, Oxford, 2nd ed.
- Cortese 2015: D. Cortese, “The Nile: Its Role in the Fortunes and Misfortunes of the Fatimid Dynasty During its Rule of Egypt (969–1171)”, *History Compass* 13/1, pp.20–29.
- Crone & Cook: Crone, P. & M. Cook, *Hagarism: The Making of the Islamic World*, Cambridge.
- Ellenblum 2012: R. Ellenblum, *The Collapse of the Eastern Mediterranean: Climate Change and the Decline of the East, 950-1072*, Cambridge.
- Frantz-Murphy 1981: G. Frantz-Murphy, “A New Interpretation of the Economic History of Medieval Egypt: The Role of the Textile Industry 254-567/868-1171”, *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 24-3, pp.274-297
- Frantz-Murphy 2001: G. Frantz-Murphy, *Arabic Agricultural Leases and Tax Receipts from Egypt, 148-427 A.H./ 765-1035 A.D.*, CPR XXI, Wien.
- Gaubert & Mouton 2014: Gaubert, Ch., J.-M. Mouton, & W. Godlewski, *Hommes et Villages du Fayyūm dans la Documentation Papyrologique Arabe (Xe-XIe siècles)*, Genève.
- Goitein 1967-1988: S.D. Goitein, *A Mediterranean Society: The Jewish Communities of the Arab World as Portrayed in the Documents of the Cairo Geniza*, 5 vols., Berkeley.
- Grob 2010: E. M. Grob, *Documentary Arabic Private And Business Letters On Papyrus : Form And Function, Content And Context*, Berlin.
- Grohmann 1934-62: A. Grohmann, *Arabic Papyri in the Egyptian Library*, Cairo, 1934-1962.
- Hopkins 1984: S. Hopkins, *Studies in the Grammar of Early Arabic: Based upon Papyri Datable to before 300 A.H./912 A.D.* (London Oriental series, v. 37), Oxford.
- Hunter & Jefferson 2004: E. C. D. Hunter and R. J. W. Jefferson, *Published Material from the Cambridge Genizah Collections: a Bibliography 1980-1997*, Cambridge.
- Mayerson 1997: Ph. Mayerson, “The Role of Flax in Roman and Fatimid Egypt”, *Journal of Near Eastern Studies* 56-3, pp.201-207.
- Morimoto 1981: K. Morimoto, *The Fiscal Administration of Egypt in the Early Islamic Period*, Kyoto.
- Petry 1998: C. F. Petry (ed.), *Islamic Egypt, 640-1517* (The Cambridge history of Egypt, vol. 1, Cambridge).
- Rāḡīb Yūsuf 1982-1992: Yūsuf Rāḡīb, *Marchands d’étoffes du fayyūm au IIIe/IXe siècle, d’après leurs archives (actes et lettres)*, vol. 1, 2, 3 (Supplément aux Annales islamologiques, cahier no. 2, 5, 14), Caire.
- Rapoport forthcoming: “The Fayyūm, from the Ptolemies to the Ayyubids” Author’s draft.
- Reif 1988: S. Reif, *Published Material from the Cambridge Genizah Collections: a Bibliography 1896-1980*, Cambridge.
- Shaked 1964: S. Shaked, *A Tentative Bibliography of Geniza Documents. Prepared under the Direction of D. H. Baneth and S. D. Goitein*, Paris.

- Sijpesteijn 2013: P.M. Sijpesteijn, *Shaping a Muslim State: The World of a Mid-eighth-century Egyptian official* (Oxford studies in Byzantium), Oxford.
- Sundelin 2004: L. Sundelin, "Introduction: Papyrology and the Study of Early Islamic Egypt", in *Papyrology and the History of Early Islamic Egypt*, Leiden.
- Udovitch 1999: A.L. Udovitch, "International Trade and the Medieval Egyptian Countryside", *Agriculture in Egypt: From Pharaonic to Modern Times* (Proceedings of the British Academy 96), Oxford, pp.267-285.
- Watson 1983: A.M. Watson, *Agricultural Innovation in the Early Islamic World: The Diffusion of Crops and Farming Techniques, 700-1100*, Cambridge.
- Wilfong 2002: T. G. Wilfong, *Women of Jeme: Lives in a Coptic Town in Late Antique Egypt*, Michigan.
- 佐藤 1986: 佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会：イクター制の研究』山川出版社
- 清水 2012: 清水和裕「紙の伝播と使用をめぐる諸問題」『史淵』149, pp.79-97.
- 清水 2014: 清水和裕「製紙法の伝播とバグダード紙市場の繁栄」『イスラーム書物の歴史』名古屋大学出版会、pp.31-45.
- 長谷部 2012: 長谷部史彦「オスマン朝ガルビーヤ県北部の農村世界：1686年の亜麻運搬船襲撃事件を中心に」『ナイル・デルタの環境と文明 I』早稲田大学イスラーム地域研究機構、pp.75-86.
- 森本 1975: 森本公誠『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』岩波書店